

(4) 本人大会

本人大会も同時開催され、700人の仲間が参加され、いろいろな制度について知る分科会とか、将来について考える分科会とか、ふれあい体験観光など6つの分科会に分かれ、

- ① 全国の仲間が集まって、お互いに意見を出し合い、自分たちのその考えを親、支援者、学校の先生、職場の人たち、地域の人たちに伝えよう!
- ② みんなで楽しく交流して仲間づくりをしよう!
- ③ 本人活動していると楽しいことがいっぱいある。みんなに知ってほしい!

この3つの目標を、それぞれの分科会で話し合い、全国の仲間と一緒に実現したいと発表されました。

分科会報告

次号との2回に分けてご報告いたします。
今回はその第1弾です。

【第1分科会】

育ち：家族支援・子育て支援と特別支援教育

分科会は、育ちをテーマに家族支援・子育て支援と特別支援教育について、明星大学の吉川かおり先生の基調講演とふたりの母親からの切実な提言と特別支援学校で教えておられた先生のご経験のお話がありました。

若いお母さんから、これからの子育てや就学の課題、特別支援学校と統合教育、交流学習の選択等、心からの悩みを訴えられました。

育成会活動に関して、幼児・学齢期においても、さまざまな支援が展開されていることを教えて貰ったり、早期発見、早期療育の重要性をいわれ、家族支援、子育て支援、教育と早期から本人を中心とした支援のネットワークづくりも進められていることも報告されました。

一方、2人の発達障害をもつ息子さんを育てられている母親からは、ご長男は、幼稚園は普通で小学校から特別支援学校、高等養護を経て、今はレストランで働いていることと、ご次男も多動で障害があることから、兄弟2人を育てることで親として障害と向き合い成長させて貰ったこと、育成会との出会いで障害を受け止めることができたこととお話されました。その中で交流教育、統合教育が必要といわれているが、普通学級に行けば、介助の手立てはできないと言われたり、教師の姿勢で対応が変わるといふこともあったとのこと。また、他の参加者のある母親からは、普通幼稚園に行かせたが、不安感が

らか2年間、毎日泣きながら行っていた。今は養護学校に行ってよかったと思っているとの声もあった。若い保護者の方々の切実な悩みや声に耳を傾け、いま改めて育成会として、子どもやお母さん、お父さんへの就学、交流学习、進路相談や支援について考える必要があると思います。(長田 昇一)

【第3分科会】

企業で働く(就労支援と生活支援)

コーディネーター

全日本育成会就労支援委員長 本田 隆光

基調講演

(株)ダックス四国 且田 久雄

ポリエチレン製折箱製造の高知県の特例子会社で、労働条件は障害者も全て正社員として採用。最低賃金除外申請は一切しておらず、グループ会社の雇用率は8.49%と法定雇用率を大幅に上回る。各職場に必ずサービス管理責任者を配置して、側面からサポートして障害者と共に働く工夫をしている。離職率は少なく5%。障害者雇用に特に優れた取り組みを行なう企業として厚労省から障害者雇用優良企業認定を受けた。「こんな子だから」というあきらめの気持ちをなくして下さい、と結ばれました。

シンポジウムで滋賀県の白杉氏は国の事業に先んじて地域の窓口として「障害者働き・暮らし応援センター」を設立。生活支援なくて働くのを支えられないと、おおつ障害者就業・生活支援センター長として滋賀県の取り組みを提言。

岩手県のパン屋で働く男性は、障害があっても働ける喜びや、現在のホームを出て一人暮らしをし、実家で生活できるようにしていきたい思いを語りました。

青森県八戸市職親会は、障害者の雇用促進と職場定着を願う事業主で活動をはじめ、「あせらず、ゆっくりと」「就職率より定着率を重視」「会の中心は障害者」という運営方針を受け継ぎ20周年。15名から50名ほどの企業が大部分で会員は63団体、財政援助の賛助会員80団体。養護学校との協同で歩み、現場実習の受け入れ、卒業生の雇用、就職後の職場定着支援を行なっているのが特色。職親会は社会的自立も支援する企業団体で「働く場」「暮らす場」「楽しむ場」の生涯の確保に向かってニーズと共に拡大し、グループホームを整備するための資金面のバックアップ支援もしている。

障害者に関わる制度の改革とともに、企業が障害者の出来ることを見つける努力をすれば雇用はもつ